

吉井勇全集

第三卷

番町書房

吉井勇全集 第三卷 歌集Ⅲ

昭和三十九年四月二十日發行

定價一、六〇〇圓

著 者 吉 井 勇

發行者 東京都千代田區二番町二
大 島 秀 一

發 行 所 東京都千代田區二番町二
番 町 書 房

電話東京 (二六二) 六六五八
振替 東京 一五八四四
印刷 大日本印刷株式會社
製本 株式會社 昇 榮 社

落丁・亂丁はお取替えいたします。

吉井勇全集

第三卷

歌集Ⅲ

目次

玄 冬

洛北雜詠 一 續洛北雜詠 二 聖戰抄 三 神樂歌 三 病床沈吟 三
 藝苑遺韻 完 羈旅餘情 呉 先達讃歌 三

短歌風土記(大和の卷一)

橿原神宮 窓 畝傍の山陵 窓 斑鳩の里 窓 法隆寺 突 玉蟲
 厨子 窓 百濟觀音 穴 夢殿 穴 救世觀音 七 中宮寺 七
 如意輪觀音 三 法輪寺 三 法起寺 三 蟲聲唧々 七 爐邊小
 吟 一 五 秋篠寺 六 伎藝天 六 新藥師寺 七 佛ぬすびと
 六 白毫寺村 六 爐邊小吟 二 八 春日神社 八 春日野 八
 百日紅 八 馬醉木 八 奈良の鹿 八 萬葉植物園 八 蕨餅 八
 奈良博物館 八 藥師寺十一面觀音 八 諸佛諸元 八 佛頭佛手
 八 維摩居士 八 伎樂面 八 天燈鬼 八 和琴その他 八
 勾玉抄 八 伎樂幻想 八 鏡の歌 八 鬼と戯る 八 奈良の芭
 蕉 八 塀つくり 八 爐邊小吟 三 六 佐保の山陵 六 東大
 寺 八 廬舍那佛 八 大佛開眼 八 戒壇院 一〇 邪鬼の歌
 二 二月堂 一〇 執金剛神 一〇 奈良の時雨 一〇 觀音院 一〇
 爐邊小吟 四 一五 鷗外遺簡 一六 秋日移居 一七 雨の日ぐらし
 一八 夜ふかく 一八 みほとけの歌 一九

金 泥

寒 行

鷹ガ峰 二三 本阿彌光悅 二三 眞葛ガ原 二三 大雅堂 二四 羅漢圖 二五 大徳寺 二六 元利休 二七 落柿舎 二七 松尾芭蕉 二八 油光院 二八 連月抄 二九 揮毫兀兀 二九 栖鳳の冬 二三 ころ足る 二三

流 離 抄

洛北雜詠 二四 續洛北雜詠 二五 爐邊獨語 二五 玄冬居愚草 二六 鑑賞餘響 二六 北陸雪中吟 二七 高志消息 一八 蓬廬聯吟 二四 北陸荊中吟 二三 讀餘述志 三三

短歌風土記(山城の卷一)

桂離宮 二四 城南消息 一 二六 京都博物館 二六 城南消息 二 三三 眞葛ヶ原 三三 祇園懷舊 三三 夢二の紅燈畫譜に題す 三五 城南消息 三 三五 南座三題 三三 松花堂即吟 三六 城南消息 四 三六 八幡山藍 三一 放生川 三三 女郎花塚 三三 城南消息 五 三三 圓福寺 二四 泥龍窟 二四 寶青庵小景 三五 竹林彷徨 二六 薪一休寺 二六 城南消息 六 二七 二條の陣屋 二七 柳巷行 二七 島原角屋 二七

殘夢

城南雜詠 二六

續城南雜詠 二五

形影相憐 二九

寶青庵朝夕 三〇

八幡俚謠 三六

形影抄

八幡民謠 三三

洛中閑吟 三五

續京洛閑吟 三九

『形影抄』以後

昭和二十六年 四〇

四〇

昭和二十七年 四六

四六

昭和二十八年 四三

四三

昭和

二十九年 四四

四四

昭和三十年 四三

四三

昭和三十一年 四四

四四

昭和三十二

年 四七

昭和三十三年 四六

四六

昭和三十四年 五三

五三

昭和三十五年

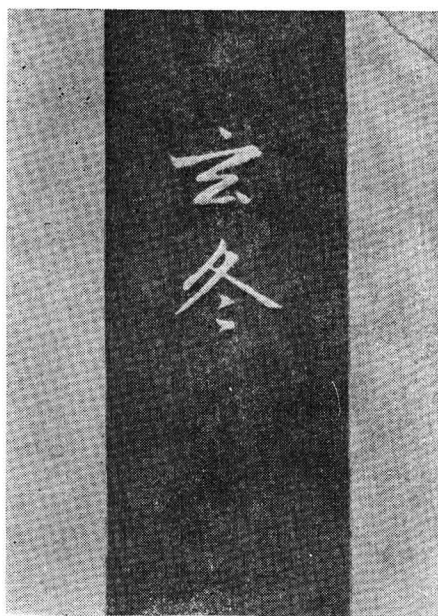
五七

解説

木俣修：三三

玄

冬



昭和19年6月発行『玄冬』表紙

洛北雜詠

四明山下に閑居すること既に六年、無能無才にしてその一筋につながるといふ境涯にも、漸く安んずる齡となりぬ。藝道一心にその日を過せば、嚴しきたたかひの世に會ひても、ますらを心いまだ怯まず。

爐邊感慨

やうやくに心嚴しくなりけり火のなき爐邊に
腕組み居れば

嚴しきは寒さかあらず身に迫る夜氣か否とよ胸
ぬちのころ

夜ふかく玻璃戸を徹す霜の冴えころの冴えは
すでに久しも

たたかへる人を思へば夜を爐邊に在るもかしこ
き己が身とぞする

身も氷れ心も氷れ爐の灰も氷れとぞおもふたた
かひ思へば

爐邊にゐて眼を閉づること幾度何の祈念に過ぐ
る時ぞも

爐邊にゐて番茶をすすること幾度ころ渴ける
われならなくに

寒き膝撫でつつ居れば童園のはげしき歌も胸に
うかび來

夜ふかく心たぎちに堪へでぬ筆も劍になさん
ずおもひ

神神のたたかひたまふ姿をわれ爐邊にゐて遠
くおもはむ

蟲聲 唧々

夜ふかく寢酒は酌まねひとり起きて遠蟲の音に
耳をかたむく

腸に當つる懷爐も冷えにけり夜深の蟲の聲も
絶え絶え

蟲は蟲の憂ひごとあり小さな悲願を持ちて鳴
けるもあらむ

病み疲れ癒ゆれど夜半に蟲聽けば生死事大とな
ほ思ふあはれ

恥かこれ悔しさかこれ胸のおもひ蟲に問へども
蟲はこたへず

蟲鳴くを或は雨かとうたがひて頭もたげぬさむ
き夜床に

こみあぐる怒り壓へて蟲を聽くこの寂しさは知
るひともなし

蟲の音に聽き入り居れど己が心しづかに遠く動
かむとする

乾鮭のからきを食みて蟲聽けばわれのわびの
暮しこと足る

蟲よりもわが身あはれと思ふ夜もありき寒けく
肱曲げて寝む

十二月八日

十二月八日の朝のすがしさをいまだ忘れず比叡
の空見る

その日より肩聳やかす癖つきぬ國こぞり起つ心
きほひに

大詔^{みことのり}くだるすなはち海のうへ霹靂^{げん}鳴れりすが
しきかなや

世はここに大きく變る十二月八日の朝の空のゆ
ゆしさ

その朝の大みことのり嚴^{げん}として思ひ出すたび胸
をふるはす

大東亞戦争起りたる年はすでに去年^{こぞ}かも時や
きかも

その日よりわび居^みの庭の石に降る霜の聲さへ冴
えにたらずや

眞珠灣のいくさの知らせ聴きし朝の胸とどろき
を忘れじとこそ

その朝のすがすがしさはわが庭の竹に聴くべし
石に聴くべし

この大戦争を知らずい逝きたる土佐の酒麻呂^{さかまろ}
思へばかなしも

みことのり聴きて目潤^{めうる}み身震へし朝も昨日のご
としと思へや

一年^{ひととせ}はいつしか過ぎぬ眞珠灣を撃ちし朝^{あした}の水仙
の花

かの朝の大みことのり嚴としてなほ耳にあり伏
して思へらく

曉天祈願

北白川天神詣^{きたしろかはてじんまうで}すると出づ霜嚴^{しもぎ}しかるわび居朽門^{みくらど}
を

たたかひに昂^{さか}ぶる心おさへつつしづかに霜は踏
みて往かまし

霜しろき朝明の道は神の道このまま直に天通ふ
道

遠天に霜降る音もまさに聴く心いよいよ澄むに
かあらむ

何の實か落つるひびきすしづけさは寒さにはか
に凝り來しごと

柏手の音一つかも寒きかも曉闇に吐く息白き
かも

曉天に立ちて祈れば老禰宜の皸唄れごゑも親し
まれつつ

石段をのぼり來る人の足音を遠潮騒のごとく聴
きゐし

ひた祈りに祈りておのれのなき時やわれの心も
天飛ぶらむか

除夜小吟

明日は年立つといふ夜のしづけさやものを煮る
香のいとど親しく

大きな年迎ふる夜の爐のほとり軍茶利夜叉を思ひ
てわが居り

春ちかき京のわび居の夜の厨年待ち顔に何をか
も煮る

やをら起ち闇にのぼる夜のさむさ窓打つ風も春
とおもふに

年立たば玉鉦百首くりかへし讀まむとおもふ
夜の爐邊に

爐の灰も淨めぬ炭も繼ぎ足しぬいざかへりみむ
一年のこと

洛北迎春

大威徳明王を思ひゐたりけり勝いくさ年迎へ
むとして

たたかひに勝たむ心を持ちて見る年立つ朝の大
比叡の山

一切れの乾鹽鮭もをろがまむ心となりて年は迎
へむ

たたかひに心きほへどしめやかに年は迎へむ京
のわび居に

目潤むは餅を焼く香のしむゆゑかたたかふひと
を思ふあまりか

ゆゆしくも年立つ朝や萬歳のこと大比叡の嶺に
ひびかふ

年立てば草莽に住む身なれども君をこそ祈れ國
をこそ祈れ

腸をまこと斷ちたるうつそみと思ひいとしむ
年のはじめに

一片の餅焼くなべに撫でてゐぬ去年のままなる
頸の髯

むづかしき羅漢顔ともなりぬらし年立つ今日も
寄せ眉をして

むかし見し救世観音のほほ笑みを年のはじめに
かへりみまつる

年立てど師走八日のかの朝の大清淨の心わす
れず

心ふと厳しきものに觸れしかば年立つ今日もひ
たにもの思ふ

神明の氣

われらみな神の裔^{すま}ぞとおもふとき身ぬち胸ぬち
澄みて年立つ

身に徹^まり胸澄ましむるものあり神明^{しんめい}の氣とこ
れを言ふらむ

われら呼ぶ神のみ聲かあらじかと耳を澄ましぬ
あかつき闇に

ひたすらに神意に思ひ入る朝のいや嚴^{いづ}かしき霜
のいづかな

あたらしく年立つ朝の空を見て神明の氣にをの
のきまつる

春日籠居

たたかひの世も夢殿^{ゆめどの}の觀音は笑みいますらむ春
をしづけく

寺でらの佛の顔をおもひつつ春日を浴みて朽縁^{くろえん}
に居り

もの古りし斑鳩^{いかるが}でらの壁の畫を目閉ぢおもへば
春立つらむか

觀音の御掌^{みで}のぬくさも思ふなり春日^{はるひ}あかるき朽
縁にして

春の日をこもりて居れば古寺^{ふるでら}の乾漆佛^{かんしつぶつ}もなつか
しきかな

酒鬼像

或る日五條阪の中西公雄君、陶匠仙雞の作に
かかる酒鬼の像を齎らし來る、放庵君の繪に
據つてつくれるものなり。

土ながら歎きの姿あらはせる背くぐみ鬼の瘦せ
肩あはれ

怒るごと頬を膨らして酒くさき息をな吐きそこ
こな酒鬼

夷ばら睨め逐はむと思ふときや吾も酒鬼の額の
角欲し

酒鬼の額の太角やと取らばおうと應へむ鬼のふ
と角

鬼よ汝もいくさの勝を乞ひ禱むや土型ながら額
伏せて居り

清水の陶ものつくり仙雞がつくりし鬼ぞ生きて
もの言へ

酒鬼よいざやとばかり起ちあがり異國退治に汝
もい往きね

燈臺鬼よりも厳しき姿してわが鬼はあぬ面伏せ
ながら

何ごとか念ずる鬼の縮れ髪やがていとしく撫で
にけるかも

竹博士

或る日「竹」および「竹の本」の著者竹内叔
雄博士と會す、竹を愛すること予もまた博士
に劣らず。

火桶の火乏しけれどもすがしがし竹を語れば寒
けくもなし

おもしろき竹皮の表紙撫でつつも竹の寂しさ思
ひゐしかな

われもまた愛づると云へばうなづきてまた語り
次ぐ竹博士かも

竹縁に半跏を組みて竹の歌つくらばわが世樂し
からむか

名聞も棄てて寂しく生くといふ己が言さびし
竹にかも似る

わが庭の貧しき竹を見ておもふ竹譜のなかにあ
りやこの竹

鐵翁の墨繪の竹もいまはなし流離のはてのわび
住みにして

寒ければ熱茶すすりて爐邊にぬ桂園竹譜欲し
と思ひつつ

大佐渡の小木の前島の双生の矢竹を語る旅を戀
しみ

ここだけの竹ものがたり集めたる本を手にして
心清しも

比叡風

比叡風聴きつつ思ふ夜をさむく山法師ばら眠
りつらむか

比叡風ややしづまりて夜は深し風ならなくに胸
打つや何

祖父の三峯日記讀みさしてたかぶりどころ比叡
風聴く

三峯とするせし梅の繪をながめ比叡風聴く夜は
しづかに

比叡風朝な夕なに聴くほどに淨土の寒さおぼえ
たらずや

比叡風寒しと云ひぬ吾子滋爐邊に本讀むこと
も倦みけむ

吾子よ汝も比叡風の吹ききたる肅殺の氣にを
ののくものか

爐にありて吾子はいつしか眠りたり比叡風も遠
くかそけく

雪すこし比叡風に吹かれ來ぬわびしきものか今
日の夕戸出

ふと見れば遠比叡が嶺に雪降りてわれのわび居
も寒に入るらし

鶯の歌

朝ごとに來るは鶯か燵石打つにかも似る鳴く
音きびしも

傳教のつかひの鳥の比叡鶯今朝もまた來つか
しこしと見む

朝床の枕に頬當て夢うつつ聽けば鶯のこゑの愛
しさ

朝ごとに來ては玻璃戸を荒く打つ鶯の怒り知る
よしもなし

玻璃戸打つ音に驚破と起きて見ぬ鶯おとなふも
のと知らずに

庭貧ししは鶯の身を置くにふさふと思ふよき
枝もなく

鶯はも茶禪の寂びを知ることく苔いや鏽びし石
にとまりぬ

ひたむきに戦さにこころゆく朝は鶯の聲もいや
牙えにけり

わが庭をよしと思はば比叡鶯高鳴きしつつ朝ご
とに來よ